



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレスの存在論的倫理学 : 紹介と批評 : David Charles Aristole's Philosophy of Action Duckworth 1984 pp.282 + xi
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大學文學部紀要, 41(1), 101-125
Issue Date	1992-09-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33597
Type	departmental bulletin paper
File Information	41(1)_PL101-125.pdf



アリストテレスの存在論的倫理学

紹介と批評：David Charles *Aristotle's Philosophy of Action* Duckworth 1984 pp. 282 + xi

千葉 恵

D. チャールズは『アリストテレスの行為の哲学』において従来のアリストテレス研究史上独立性をかなり保持していた倫理的諸問題を存在論的形而上学的枠組みのなかで論じている。そこでは言わば倫理学と存在論がひとつのものとして考察されている。アリストテレスの諸著作にシステマティックな行為の理論があるということを前提にした、新しい装いのもとでの『ニコマコス倫理学』研究書と言っても誤りではないであろう。だが同書の従来の研究書と同じペースで読める箇所は第4章ぐらいであると思えるほど、スタイルが従来とは異なっている。著者の論述は典型的な分析哲学のスタイルでありアリストテレスのテキストを現代の文脈のなかで解釈し、考えられる異なる解釈や反論を執ように精査しそれぞれの利点と欠点を評価しながらアリストテレスの立場を明確にしてゆく営みである。ここでは著者は、デヴィッドソンの出来事の理論などを援用し現代哲学の行為論を踏まえ、Corpus全体からアリストテレスの行為の存在論を析出し、現代哲学のそれと対話させ評価しあいアリストテレスの立場から現代の代表的な立場を批判している。第1章C、Dと第5章がとりわけ著者の現代哲学の行為論と心身論の文脈における貢献であろう。第3章において意図や合理性そして実践推論との関連のなかでの Socratic puzzles の興味深い整理がなされているが、そこで打ち出される合理主義との対比としてのアクラシア（意志の弱さ）の詳細な究明は問題の所在を鮮明にしている。ここではこの書の中心的主題と思われる第1、5章の論点を整理し心身論の観点から見られた行為の存在論的構造とそ

の解明の手がかりとなる程度においてだけアクラシアを取り上げ紹介吟味したい。第2, 3, 4章における他の重要な論点例えば意図, 欲求そして合理性もこの二つの論点のなかにかかなりの程度組み入れられているので, その都度関連箇所を挙げることにする。

1

第1章(存在論と説明)で著者は行為を論じる際, アリストテレスの過程(kinesis, process)の理論をとりあげその同一性規準や個別化規準を論じ, 何かを一つの行為と言えるための行為の規準の存在論的枠組みを提示する。そしてそれは必然的に現実活動(化)(*energeia, actualization, activity*)と状態(*heksis, state*)等の存在論的諸概念の機能や過程との相互の関連の解明に進ませ, また因果性(始動因), 説明, 心的と物理的なものの関係等の立場の明確化を迫るものである。過程は或る基体の与件の能力の現実化である(p. 17)とも可能的に可変であるかぎりにおける可変であるものの現実化(p. 20)とも規定される。過程は自ら本質的特性をもつ自然種と解されるが過程の本質的特性は変化の基体と変化の最終点(そのゴール)を含む。過程を確定するのは或る種のタイプの潜在属性の現実化を指摘することによってである。著者は行為の構造を過程のこの存在論的枠のなかでとらえようとする。『自然学』3巻1-3章, 5巻4章等における過程の同一性条件の論述から数的同一性と同値関係の区別を読む(p. 6 ff, p. 30 n. 23)。過程の数的同一性の規準はこうである。

過程 x = 過程 y iff

(1)もし“P”が x の本質を特定し“Q”が y の本質を特定するなら, “P”と“Q”は定義上同じである。

(2) $(\forall t) (x \text{ は時間 } t \text{ にある iff } y \text{ は時間 } t \text{ にある})$

(3) $(\forall s) (x \text{ は } s \text{ (実体) を含む iff } y \text{ は } s \text{ を含む})$

(4) x と y は同一時点において始まり終わる (p. 11, p. 15)。

もし過程が第一義的につまり数において一であるならそれらは同じ本質を

持つ (ie. 本質を開示する定義が同一) か同義語によって提示されるものでなければならない (eg. *raiment, dress*)。しかし、著者は202 b 14-19の読みに基づいてアリストテレスの過程の同一性規準のより適切な解釈は次の「或る意味において一」ないし「ゆるい同一性」であるとする。

過程 x = 過程 y iff

(1) x と y は変化のための同じ能力の現実化である。

(2) と (4) は先と同じ。

(3) $(\forall s) (s \text{ は } x \text{ の変化の本質的基体である iff } s \text{ は } y \text{ の変化の本質的基体である})$ (p. 18)。

(3)における変化の基体は内包的にとらえられてはならず、「コリスコスが歩く」と「白いものが歩く」が、両者が外延上同一な場合に、異なる過程を述べているわけではない。また本質的特性によって基体が記述される必要もない。一つの過程にいくつかの記述がありうる。例えば(i)「灰色が青色になった」(ii)「海はソクラテスの好きな色になった」(iii)「空の反射物が青色になった」この三つは同じ過程を記述するでもあろう。しかし(ii)「海は暖かくなった」は海が青くなることとは異なる過程であらう、もしその当該の能力が異なりそして「青」と「暖かさ」という異なるゴールを持っているとするならば (p. 18)。

アリストテレスのこの同一性規準は不完全であって、その補足として、何が変化の一つの能力でありまた何が変化の一つの(タイプの)潜在性質とみなされるのかという個別化の規準が明確にされねばならない (p. 19 ff)。変化のための、判別される能力の数だけ過程の判別される種の数がある。「人が走るのは歩くのと同一种の運動か?」という問いはこれらの異なる運動は本質的に特定される人の同じまたは異なる能力に依存するのかを問うことである。ここでは、使用される筋肉の違いや物理的条件の違いが本質的に使用されるものの違いと運動の種の違いを示す。従って、種の望ましい理論における固有質料(無条件的基礎) (*categorical bases, oikeia hule*) の数だけ変化の能力の数があると言える (p. 22)。しかし最も抽象的なレベルでのアリストテレスの説明は過程をその本質的特性によって個別化することにだけ依

存している (p. 22, cf. p. 35)。しかしこのアプリオリなレベルではアポステリオリに発見される当該の能力の数は確定できない。他方、中間レベルでの理論によれば変化の能力を区別するのはゴールと当該の能力の固有質料における差異である (p. 23)。或る有機体にとって、能力差により過程の種を決定する二つのルートがあり、それは当該の固有質料を区別することと、その能力が方向づけられている有機体のゴールを区別することによってである。ところで目的論的理論は含意される潜在性質についての固有質料を説明する。つまり与件の有機体のなかでは、成就されるべきゴールの数は当該の固有質料の数と同じである。各能力はそれが向かう有機体のゴールによって、またその有機体における固有質料によって区別されるであろう。二つの能力が同一なのはただそれらが同一のゴールと同一の固有質料を持つ時だけである。かくして能力における差異は種における差異を産むので (249 b 11-14)、異なる能力があるだけ、その数だけ異なる種類の過程があることになる (p. 23)。

著者は『自然学』3巻3章における教授と学習のケースに注目し過程の同一性に関し重要な主張を引き出す。教授と学習の能力はゴールと質料的基礎双方において判別されるので、個別的な教授と学習のケースは別の過程である。アリストテレスはSのTを教授することとTのSから学習することを「或る意味において一」(202 b 15-16, p. 27) とするが、TのSからの学習は過程と同一であり、SのTを教授することは過程「に属する」ことだとされる。教授と学習は数としては区別されるが、或る意味で、つまり教授はそれの基底となる学習「に属している」という意味で一である。アリストテレスは厳密には過程を学習と同一化しているので、両者の基底となる非方向的過程は存在しない。すべての過程はアリストテレスにとって方向的 (1174 b 4-5)、関係的 (200 b 28 ff) であり、与件の基体の能力の実行である。学習と教授は字母と語節のような質料と形相の類似関係でとらえられ、学習は基底的過程 (underlying process) であり、教授はそれと同一でなく、それに属する。学習 (字母) がある状況のもとで、教授 (語節) の出現を質料的に必然化 (materially necessitate) する。これは非対称的な関係で後者は前者なしには成立しえない。著者はアリストテレス的基底的過程を次のように規

定する。

z は y に対して基底的过程である iff

- (1) $(\forall t)$ (z は t (時間) においてある iff y は t においてある)
- (2) $(\forall s)$ (z は s (実体) においてある iff y は s においてある)
- (3) z と y は外延的に同一の指定された点で始まりかつ終わる。
- (4) C (因果的先行条件) における z の生起は y の生起を質料的に必然化する (p. 28-29)。

著者は先の非対称性を克服して或る意味での同一性をこの基底的过程の関係においても保持すべく z と y を新たな関係 (R) のもとに規定しなおす。

zRy iff

- (1) z と y は同一の基底的过程を共有する。(z がそれ自身をその基底的过程として所有することを許す)

「 R 」をこのように定義すれば、この関係は推移的、反射的かつ対称的となる。基底的过程を共有するこの関係を著者は同一ではないが同値の関係 (equivalence relation) であるとする。学習と教授は「或る意味で一」であり「同一であるが本質において異なる」が、この二つの过程は一つと同値類 (equivalent class) の非同一的元であると解される。それらは同時であり同じ実体において生じ、一つの同じ基底的过程を共有する (p. 29)。以上のように著者は过程の能力を判別するものとしてゴールと固有質料の数をあげ、过程を個別化するものとして『自然学』の先述の箇所の釈義をとおして数的に一とは異なる「ゆるい意味で一」(p. 29 n. 21) とされる同値関係のもとに过程を質料と形相の存在論の枠でとらえる。

この立場は出来事にかんする現代哲学の二つの立場 (デヴィッドソンの外延主義とゴールドマン、キムの内包主義) のいずれとも異なる中間の立場を提示している。アリストテレスにとっては有機体の最善の理論における当該の特性の数だけ过程の数があるのであり (個別化条件)、当該の特性が有機体の最善の理論において同一なるものとして取り扱われる時にかぎりつまり同一の能力と同一のゴールの現実化であるかぎり二つの过程は同一であると考えられる (同一性条件)。ゴールドマンにとっては过程の数は非同義語过程述語

(non-synonymous process-predicates) の数だけある。「クセノホンは海に旅行した (journeying)」と「クセノホンは海に行進した (marching)」は違う過程とされる。当該の能力の実現の数だけあると理解される過程は対象が記述される言語の表現力によってではなく、当の有機体の最善の理論によって区別されるのであり、アリストテレスの過程は世界における実在であり与件の言語における述語のレンジに依存しない (p. 31)。旅行することと行進することと歩くことは、もしそれらの一つだけが (e.g. 歩くこと) 有機体の好ましい機能論のなかで要求された場合には異なる過程タイプではないであろう。過程はそのような特性の実体による例化であり過程自身が集合論的実在である必要はない (p. 43)。

他方デヴィッドソンの出来事の同一性規準はこうである。

$$e1 = e2 \text{ iff}$$

($\forall f$) (f は $e1$ の原因である iff f は $e2$ の原因である)

($\forall g$) ($e1$ は g の原因である iff $e2$ は g の原因である) (p. 32)

この規準は出来事の本質的属性のいかなる見解にもコミットせず、それ故に可能世界を横切る同一性の説明を与えることはない。この規準は一つの出来事に異なる原因と結果を持ち得ないという弱点がこの基準には潜むように見える。アリストテレスにとって、必要とされるのは例えば或る時におけるケネディーの与件の能力の現実化であったので、ケネディーの死は違った原因 (eg. マフィアに支持された CIA) を持つことが可能である。何故かと言えば、アリストテレスにとっての個的諸過程は、正に同一の過程についてそれが異なる反現実状況において生じることを有意味なものとするを我々が必要とする様相と認識の文脈において、その使用を彼に許す本質的特性 (変化の基体、現実化される能力、時間) を持っているからである。原因が異なれば出来事も異なるという直観をアリストテレスは共有しない。というのも因果性と出来事同一性のあいだにゆるいつながりを見るからである。出来事同一性は実体の潜在性質の実現化に依存するとしデヴィッドソンとは異なる説明理論によって決定される。アリストテレスの過程-同一性の説明はデヴィッドソンのそれより内包主義的である。というのも彼はただ一つの外延

的出来事があるところで異なる過程を見るからである。

もう一つの違いはデヴィッドソンは出来事を他のカテゴリーに還元不能な対象よりなる独立したカテゴリーと見ていることである。アリストテレスは過程の本性をより単純な存在論的カテゴリーで説明することを求めているが、出来事を還元不能であるが故に説明されない一つの分離された存在論的カテゴリーとして導入してはいない。アリストテレスは過程を構成するものとして属性、実体、時間等をあげることによって、過程を存在論的に基本カテゴリーとすることを避け得ている。アリストテレスにおいては過程がいかなるタイプの実在であり他の実在からどう区別されるかは現実活動や状態の違いの議論によって明かにされようが、デヴィッドソンは過程と現実活動を実在上区別しない。そこでは現実活動（現実態）と過程が異なるゴールを持つことは時制テストによって明らかにされる。現実活動のゴールは現実活動の間ずっと現在しているが、過程のそれは過程の終点においてである（1048 b 20-24）（p. 36）。両者の推論力の差異は動詞のタイプの異なる文法特徴とそれらの異なる時制－要請によって示される。アリストテレスの場合過程と状態と現実活動はそれぞれ異なる本質的属性をもつ実在であるが、後二者は実体の潜在性質の実現化という過程と「類似の構造の複合」（p. 40）という仕方ですべて統一に（in a unified way）組み込まれる。それに対しデヴィッドソンの説明においては、特徴づけが一つの出来事について前もって与えられておりかつ差異化されていない。そして過程と現実活動は両方とも出来事であり、状態は出来事から区別され原因であると認められるなら、もはや原因は個別的出来事であるということも、あるいは原因関係はただ出来事間にだけ成り立つということも受け入れられないであろう。むしろ彼は出来事間に手に入れるものと状態を含むものとのからなる二つの原因関係を要求するであろう。このようにこの理論は因果性の統一的説明を与えることが出来ないのである（p. 40）。

著者は過程、現実活動そして状態の理論によってアリストテレスは因果性の統一的説明をなしているとする。過程はことに始動因の説明において中心的な役割を果たす。「原因」という語それ自身は与件の特性を例化している

対象である過程、状態そして現実活動に関わる。しかし対象と特性が付帯的でない記述において「本質原因的」説明に現れる時だけ、この種の真なる原因文がある。アリストテレスにより対象と特性の複合とされる原因は密接に原因的説明と関係づけられる。なぜなら原因を構成する対象と特性の自体的記述が原因的説明の話に現れるからである。原因は世界内の実在であり説明は言語的で説明モデル内におかれる過程の記述に関わる (p. 50-51)。原因性と説明の間の断絶の故に、キムの説明とは異なりデヴィッドソンのそれと類似している。しかし違いはアリストテレスの原因は実体の潜在性質の実現化であるので、彼は原因の許容可能な再記述を非付帯的に実体に自体的に属する潜在性質の現実化、ないしそれが属する実体の現実化に限定していることである。かくしてアリストテレスはデヴィッドソンの理論において生じる還元不能な出来事とそれらの真なる記述の間の基本的な差異をかわしている。もしデヴィッドソンの立場から帰結するであろうように一つの過程にどんな偶然的な記述も許されるなら、原因上関連しない過程の間に原因的関係があることを示しうることになろう (p. 52)。以上のようにアリストテレスの過程と状態の存在論はゴルドマンやキムの内包主義とデヴィッドソンの外延主義の中間に有利な点を保持しつつ位置している。アリストテレスの行為論を理解する時、それは彼の存在論と因果的かつ目的論的説明双方にとって中心的なケースを提供していることが解る。

第5章(合理性、実践的知識そして行為の説明)で著者はおもに意図的な(合理的または不合理的)行為の目的論的説明と因果的説明が両立可能かを心身論の観点から論じている。まづ目的論的説明と合理性の関連が取り上げられる。目的論的説明とは当該の対象・有機体にとって善きものによる説明である。実践推論の形式でこれを図式化すれば次のものとなる。

(A) ϕ であることは人 S に善く見えかつ ϕ を為すことは ϕ への最善の道でありかつ条件 C * の生起は S の ϕ を為すことを必然化する。

しかしこの必然性はその目的を実現する材料 (p. 199, n. 3)、欲求などの心の動機的状态 (p. 201) を要求するので仮定的必然性でしかなく、この点で因果的説明と異なるとされる。因果的説明は次のように定式化される。

(B) S の ψ への欲求と S の ϕ を為すことが ψ への最善の道であるという信念かつ条件 C * の生起は S の ϕ を為すことを必然化する。

ここで(A)(B)の両立可能性が問われ著者はアリストテレスは可能であるという立場であるとする。その可能性の鍵になるのが欲求と善とのアプリアリな関係であり欲求と行為とのアポストリオリな関係である。もし S が ψ を欲求するなら、 ϕ は S に善と見えるのは必然である。ということは(A)(B)の図式においては、欲求や信念による因果的説明を記述する命題が目的ないし善を記述する命題の真理性を必然化するということである。なお目的論的説明項は S の当該の欲求の命題内容を付与するものである。((A)(B)の条件 C * は表記としては同じであるが実質は異なる。)

この目的論的と因果的説明の関連はアクラティックと有徳な行為のアリストテレスの取扱いから補足することができる (p. 201)。アクラテースの行為は合理的に説明されるが、合理的な行為ではない。このケースにふさわしい目的論的パターンは次のものである。

(C) x であることは時間 t1において S に善く見えかつ ψ を為すことは x に至る道に見えかつ条件 C * の生起は S の ϕ を為すことを必然化する。

ここで ψ は善いと見えるが最善ではない。人の不合理的行為は彼の明瞭な動機的状态による穏健欲求—基礎理論 (Moderate Desire-based theory) によって説明される。これは彼の目的や理性の価値評価によってではなく欲求の強さによってつまり始動因によつてアクラシアが説明されるという立場である。従つて目的論的図式における諸条件 C * のうち、その生起がアクラテースの行為を説明する十分な条件は動機的状态である。アクラテースはエンクラテース (意志の強い人) と同じ結論を受け入れるが違いは動機的状态である。彼の行為は彼が受け入れる価値命題によっては十全に説明されない不合理的なものである。ただ動機的状态という条件がアクラテースの行為を説明するので合理的な説明は可能である。かくして目的論的説明の先行諸条件の詳細な特定化が行為の始動因的 (不合理的) 説明から引き出される情報を含むことになるであろう。つまり目的論的説明はそこにおいて前提が結論を必然化する道を示すべく要求される当該の質料をアポストリオリに因果的に具

体化するのである (p. 202)。アクラテースとエンクラテースは善い実践推論の結論をシェアするにしても (前者の把握は情念に引きずられるために「色あせた流儀 (off-colour fashion)」においてである (p. 120)), それでも異なって行為をするのは心理的生理的条件の現在化のゆえであり、情感的欲求 (sensual desire) がひとつの行為に導くか否かは経験的な問いなのである (p. 202)。

不合理な行為 (アクラシア) には有機体のある物理的状态そして行為者の状況の価値評価と動機的状态の分裂において生じる心理的状态 (動機的状态) が含まれる。従って、欲求と信念を使用するアポステリオリな因果的説明の可能性を排除する理由はないのである (p. 204)。アリストテレスのアクラシアの説明はそのもとでSのアクラティックな方向への欲求が圧倒的である条件を述べるアポステリオリな心理的-物理的因果的説明である。エンクラテースと賢明な人 (ソープローン (the temperate) またはプロニモス (the practically wise)) はそこにおいてアクラシアがおこる物理的状态を欠くし、他方賢明な人は行為者の価値的と動機的状态のあいだの分裂がそこにおいてある心理的状态を欠いている (著者はソープローンとプロニモスを同義にないし少なくとも前者は常に後者であるとして用いていると思われる。cf. p. 164, 174, 181)。そういう事情であるとすれば、合理的行為の「因果的」説明の一般化は次のものとなる。

(RA) Sの ϕ を最善の選択として欲求しかつ ϕ を為すことは ϕ への最善の道でありかつ $P1 \dots Pn$ を所有しないということは、Sの ϕ を意図的になすことを必然化する。

ここで「 $P1 \dots Pn$ を所有しないということ」はアクラシアにおいて生起する物理的状态を所有しないということ、あるいはこれこれの有機体の物理的条件のもとで合理的行為のために「適正な質料が固有の特性とともに現存している」(703 b 35 ff) そのような物理的状态である。

他方合理的行為のアプリオリな図式は次のものである。

(ARA) (1') ϕ は $t1$ にSに最善に見えかつ ϕ を為すことはSにとって ϕ への最善の道でありかつSは合理的でありかつCを手にいれているこ

とは、もし彼が意図的に行為するなら、Sの ϕ を為すことを必然化する
(ここでCは単に能力と機会の条件にすぎない。)(p. 205)。

この図式はアプリオリなものであり、完全合理的説明 (Full Rational Explanation) と呼ばれる。これはアクラテースの不合理な行為を説明できない。行為者が合理的な時はアクラテースの不合理な行為を説明する特性によっては影響されずに彼の最善の判断にそって行為するからである。

もしこのような事情であるなら完全合理的説明図式 (ARA) (1') は単に因果的説明図式 (RA) と両立可能であるばかりでなく、因果的説明図式に基づいている。合理的行為の心理的-物理的因果的説明と目的論的 (合理的) 説明の両方があるが、後者が可能なのは或る因果的説明特性を所有している時だけである。因果的と合理的な心理的-物理的説明に依存関係がある。これは合理的説明の第2の図式によってより明らかにされるであろう。

(2) ϕ を為すことは最善でありかつSは適正に ϕ は最善であると受け入れ
かつC*を手に入れることは、もし彼が意図的に行為するなら、Sの ϕ
を為すことを必然化する。

これも「適正受容」とは善なるものを為すという目標を成就する仕方であるのでアプリオリといえる。しかし結論を適正に受容するのは動機の状態が十全に価値評価と統合されていてアクラシアの可能性が排除されている時にかぎる。しかしこれらはまさにそのもとで (RA) が真となる条件であるであろうまたこれらは (RA) において具現化される心理的-物理的原因の材料の現存を要求するであろう。というのもこれこそが情念的欲求が行為者の彼の最善の判断にもとづいて行為するのを妨害するのを防ぐものだからである。それ故に合理性を包摂する(1')と(2)のアプリオリな図式はアポステリオリな心理的-物理的因果的説明の真理に基づいているのである。アクラシアこそが合理性と心理的-物理的因果的説明とのあいだに道をつけるものなのである (p. 206)。

合理的説明と心理的-物理的説明は両立不能であるという反論も考えられる。我々の欲求と信念の概念はアプリオリに全体的な合理的説明のパターンに結び付けられているので、欲求と信念をアプリオリなものから切り離す心

理的—物理的説明においてはそれらが使用されることはないであろうという反論である。しかしアリストテレスは因果的と合理的説明のあいだの相互依存を主張する。賢明な人は幸福であることの構造化された目標を持ちかつ幸福の描きと動機の状態を統一している。そこでは選好と行為の最大限に合理的なパターンを見いだす。それは価値づけられたゴールと動機の状態の統一と変容を成就しているからである。

正当化機構は究極的には行為者の幸福の見解に結び付けられ、そして正当化は経験的には行為者の快楽均衡と動機の状態の光のもとにおける価値の獲得と分配の理論によって説明機構に結び付けられている。しかし正当化機構が欲求と信念の説明機構から独立に把握されうかが問われうる。行為者の価値評価と動機づけはいかに彼が行為するかから独立であるとする証拠（e.g. 賢明な人とエンクラテースの差異）がある。従って人が合理的に行うか否かは経験的な問いとなる。もし我々が行為者の価値と動機の状態を把握しうらば、彼が為すことがいつ彼の幸福の描きにマッチしたマツしそこなうかを示すことができる。しかしアリストテレスは行為者の価値と欲求を経験的に決定する実験装置を考案しなかった。むしろ彼の関心は行為者の行動だけよりも価値評価と動機づけに関連する証拠のより広い領域があるということと幸福の描きを前提にした場合に行為者の選好が最大限に合理的であることを期待する一般的なつまり非経験的な理由は存在しないということを強調することにある。価値と行為のあいだは経験的な関係なのである。デヴィッドソンの合理性の概念は心理的—物理的因果的説明と両立しないであろうが、アリストテレスの場合には合理的行為者は価値の獲得と維持そして価値正当化また動機の状態の統一に関係づけられるよりひろい経験的連関に依存するので、合理性は心理的—物理的因果的説明と両立可能なものとなるのである（p. 213）。

以上のように合理性が因果説明的心理—物理的理論の部分であるとすれば、二つのことが帰結する。(i)合理性は欲求することの過程の特性（i.e. 欲求されるもの；どれほど；どんな善のために）を含意するので、心理的過程と心理的特性は因果的説明理論においてある役割を演ずる。しかしもしその役割

を演ずるなら、心理的術語は心理学的過程と特性を表示しているものであり、単に物理的実在ないし特性の記述の様式として解されるべきではない。(ii) アリストテレスの基礎行為は体の運動なので (cf. p. 65), 基礎行為は心理学的始動因と物理学的始動因の双方を所有するであろう。両始動因は因果的説明の判別された要素であり、一方は心理的—物理的であり他方は純粋に物理的である。著者は物理的状态が心理学的記述の真理にとって十分条件であるという、存在論的唯物論を提唱する。その際心理的出来事、状態ないし過程は物理的状态とは「別に離れて (over and above)」あるのではない、つまり物理的なものは心理的なものに「因果的に」十分な関係にあるのではないとする。存在論的唯物論とは物理的状态の生起は心理学的記述を、(始動因的に) 心理学的出来事、状態ないし特性を存在すべく引き起こすことをせずに、「真なるものとする」とする教説である。著者によればアリストテレスのこの立場はタイプそしてトークン同一論者いずれとも異なるとする。というのも一つの心理状態は異なる物理的基礎をもつ異なる動物タイプの間で共通でありうる (タイプ同一性否定)。また過程—同一性のアリストテレスの説明では過程の種における違いは個別的過程における差異を結果として招く (トークン同一性否定)。例えば、いかなる個別的な欲求の過程もいかなる沸騰する血 (物理—化学的状态) とも同一ではありえない (p. 221)。それは先述の同値関係としてのゆるい同一性であるとされる (p. 225)。

存在論的唯物論によれば物理状態 (ph) と体の動き (b.m.) と行為 (a) そして欲求という心理学的状態 (p.s.) の必然性関係 ($\rightarrow$) (necessitation) は次のものである (O = 生起, C = 条件) (p. 215 f.)。

$$O \text{ (ph in C)} \rightarrow O \text{ (b.m)} \rightarrow O \text{ (a)} \rightarrow O \text{ (p.s.)}$$

ここで欲求は生理的物理的機構を通じての体の動きの始動因であり、心理的—物理的両条件が行為を構成する体の動きの始動因である。つまり欲求は体の動きの原因でありうるのはそれが体の動きの本質的原因として必然化する物理的状态の内部に位置づけられる限りにおいてである。なんであれ動きのある所では心理的状态は質料化 (enmattered) されているのである。従って彼は心理的過程は物理的に質料化されねばならないと主張するさいに、心

理的過程と物理的過程を同一化はしなかった。彼が要求するのは物理的狀態の生起が当該の心的出来事があるということを成立させるということである。そしてその関係は同値関係である (p. 223)。例えば「知覚すること」は延長を持つ感覚器官の可能的活動として規定されるが、物理的狀態 (e.g. 延長を持つこと) について真なる述語は延長を欠く知覚には真でないので、延長を持つ物理的狀態とは「同一であるが、本質において異なる」つまり同値関係にあるとされる (424 a 25-28)。そしてこの関係は質料・形相関係であるとされる。

二つの過程 (z と y) がこの関係にあるのは iff

- (1) z と y は同時にかつ同じ実体において生起する。
- (2) z と y は外延的に特定された同じ点で始まりかつ終わる。
- (3) z と y は同じ基底的過程を共有する。

ただし、w が z にとって基底的過程であるのは iff

(1)と(2)そして

(3') (C * における) w の生起は z の生起を必然化する (p. 221)

この関係は推移的、反射的かつ対象的であるが同一ではない。アリストテレスの存在論的唯物論は「同値類唯物論」と呼ばれうるでもあろう (p. 222)。これは次の図のⅡによって描かれよう。

心的状態 (p.s.) — 本質的原因 (或る心的記述の下で) → 行為 (a)

Ⅱ (ph) なしには (p.s.) の生起なし。

物理的狀態 (ph) — 本質的原因 (或る物理的記述の下で)

→ 体の動き (b.m.) (p. 226-7)

(個別の心理的狀態と物理的過程は同値類の区別された元である。)

著者は心理的出来事は物理的出来事に還元されないと主張する (p. 227)。アリストテレスの理論は (a) 彼の因果的説明理論 (欲求とその命題内容) において役割を演ずる心理学的特徴に関する實在論にまた (b) 欲求はその内容故にアリストテレスの心理学理論における役割を演ずるので、命題の意味論的特徴が除去されえない役割を演ずる内容—基礎心理学理論 (a content-based psychological theory) にコミットしている。合理的行為者が彼が為すように

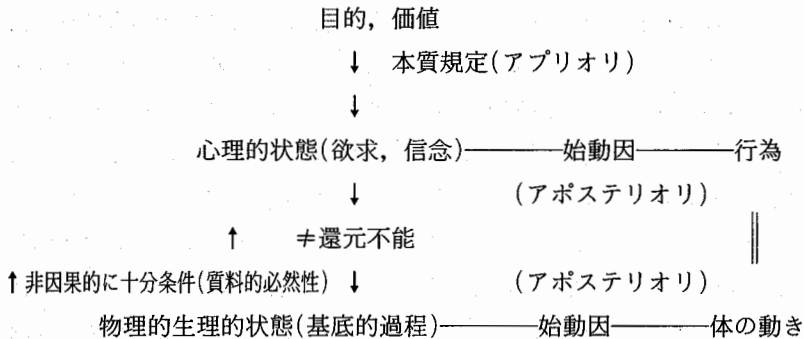
行為するのは彼の行為が（e.g.）彼の幸福の描きを含む彼の価値づけられたゴールから推論することによって正当化されるからである。アリストテレスは彼の目的論的説明の理論を通じて心的状態が（その「内容」を介して）アプリオリに或る説明役割を演ずることのできる方法を展開した。しかしこれは欲求と合理性のアポステリオリな因果的説明理論に基づいていた。つまりアリストテレスは欲求をアプリオリな（目的論的）正当化機構とアポステリオリな説明機構双方において位置づけている。正当化は欲求を概念的に幸福と実践推論に結び付けられるものであることを示している。説明機構は欲求を何も妨げなければ行為に導く要素として規定している。アクラテースをこの正当化機構においては「p は最善に思える」と受け入れかつそれに基づいて行為しないと描くことに何ら不都合なことはない。というのも、受容の様式は行為とアプリオリに結び付けられておらず、行為者の実践推論と善きものとそうであるからである（p. 232）。

正当化機構：欲求——アプリオリ——善

（目的因＝心理的現象の本質付与）

説明機構：欲求——アポステリオリ——行為（因果的）

アクラテースのケースにおいては欲求と行為のあいだに緩み（slack）があり実践推論によって正当化されたものが行われぬ。欲求のアリストテレスのこの理解は欲求、価値そしてゴールに方向づけられていること（goal-directedness）が還元不能でありかつ同時にアポステリオリな因果的説明において或る役割を演ずる存在論的唯物論の一形態を展開していることを示している。アリストテレスのこれらの還元不能性主張の受容は与件の物理的状态の現存が心理学的状態の当該の特性を説明しうるその範囲に或る限界を置いている。というのも、一方当該の物理的状态は有機体が与件の心理的状态にあることを真なるものとしようが、それはそのタイプの心理学的状態にあるということが何であるかを説明しない。というのもそれは説明の目的論的体系におけるその役割に依存しているからである（p. 234）。アリストテレスの行為の存在論的唯物論は次のように図示されよう。



結論として著者はアリストテレスは唯物論者でありかつ心的状態とその命題内容に関して実在論者であるとしたそれは占められたことのない中間位置 (an unoccupied mid-position) に立っているとする (p. 243 ff, p. 250)。存在論的唯物論者が同一性論者であったことは歴史的偶然にすぎなかったとされる。

2

さて、以上で D. チャールズによるアリストテレスの行為論における存在論的ないし同値類唯物論の展開を一応追跡したこととする。ここで著者の基本的な立場に対していくつかの疑問を提示したい。まずそもそも一体形相と質料をさらには能動と受動を二つの過程 (kinesis) としてまた同時におこる教授と学習を二つの変化の基体としてアリストテレスはとらえているのであろうか。著者のこの主張の典拠は『自然学』3巻3章202b19-22である (p. 14-17)。著者の翻訳は次のものである。

教授は厳密には学習と同一ではない、また能動も受動と同一ではない。しかしこれら (tauta) (sc. 教授と能動) がそれに属するもの：即ち過程は (sc. 厳密には学習と受動と) 同一である。なぜなら y における x の現実活動 (viz. 教授) は (本質の) 定義上 x の作用のもとでの y の現実活動 (viz. 学習) とは異なるからである (to gar toude en toide kai to

toude hupo toude energeian einai heteron toi logoi). (p. 14)

この翻訳に異論をさしはさむ者ではない。(tauta の読みにも同意する。 cf. p. 14 .n. 6) しかし最後の一文は次のように解される。

アリストテレスは変化の基体をその能力が実行されるものと解するので、S の T を教授することはそこにおいて S が変化の基体であるところの一つの過程を記述し、そして T の S からの学習は T がそこにおいて一つの基体である過程を記述する。というのも前者は S の教授することの能力を含み後者は T の学習することの能力を含むからである。…変化の基体が異なるので、教授と学習の過程は区別されるものでなければならない。だからアリストテレスは「それらは本質において同一ではない。なぜなら一方は B 者における A 者の能力 (capacity) の現実活動化 (actualisation) であり、他方は A 者の働きのもとでの B 者の能力の現実活動化だからである」と 202 b 21-22 で結論しているのである。(p. 17)

つまり x と y は A と B という人に変更可能でありここでは二つの基体が提示されているとする。著者は歩くなどの自動詞は一つの変化の基体を含むが (『自然学』 5 巻 4 章) これは教授と学習の「他動的過程にも拡張される (extended to) 」と主張する (p. 17)。評者にはこの「拡張」は不当であると思われる。x と y は各々教授と学習という一般名詞で表現されるものであり、各々の現実活動 (働き) がその本質定義上異なると言うだけに留まっており、ここに二つの基体の能力の実現化という二つの過程を読むことは出来ないと思われる。生成変化の構造を論じる同 1 巻 7 章ではそれは質料である欠如的基体が形相を獲得することだとされるが、「基体は数において一つである」(190 b 24) と言われている。知識を持たない欠如的基体である学習者が教授によって知識を持つ者となることが過程である。教授と学習の基体は一つである。(cf. 拙論「『自然学』 A 巻における生成の問題－質料概念の形成をめぐる」三田哲学会「哲学」第 75 集 1982) 先の引用文でも能動 (e.g. 教授) は受動 (e.g. 学習) である過程に「属する」と明言されているのであって、能動が過程であるとは言われていない。なおアリストテレスは 5 巻 4 章で過程は三種類の事柄 (ho kai en hoi kai hote) に関わるとしている。それ

は人のように「動かされる者 (to kinoumenon)」でありまた「場所」と「時間」である (227 b 24 ff)。ここには能動者はリストアップされていないのである。能動は過程がそこにおいて起こる受動者なる基体に「属する」というこの非対象性の故に、著者が関係「R」を持込み両者は「同一の基底的过程を「シェアー」する」と対称関係を作り出すのも不当な拡張と言わざるをえないであろう (p. 29)。非対称性とはたとえ字母 (質料) b と a があったとしても語節 (形相と質料の複合体) ba があるわけではないということである。つまり複合体の形相「ba であること」は字母 b と a をシェアーすることはできないのである。アリストテレスは言う「確かに語節は或るなにものかである、すなわちそれはたんに字母どもであるのではなくて、さらにこれらとは異なる或るなにものか (heteron ti) である。」(1041 b 16-17) シェアーしうるとすれば形相づけられた質料をなのであって、本質上異なる質料を同一の質料がシェアーするような仕方では形相は質料をシェアーすることはできない。そうであるとすればこの関係「R」から「同一だが、本質が異なる」ものどもを対称的、反射的、推移的という同値関係と理解することは非アリストテレス的であろう。(同値関係については T. Williamson *Identity and Discrimination* B. Blackwell 1990 p 10 ff 参照)

生成を免れ、運動が自体的に属する延長を持たず、現実活動 (態) であって可能態ではないとされる形相が過程ととらえられることの違和感を消すことはできない。とはいえ著者に好意的に読むことも可能であると思われる。まず著者の「基底的过程」をアリストテレスの本来的な過程ととらえることである。そして基体の能力の実現化とされる過程の定義に何らかの仕方がかかわる実現状態ないし現実活動自体を先述のような「類似の構造の複合」という「統一的流儀」に従って広い意味での過程ととらえることである。著者はこの広狭二義を一つの過程として事態を包括的に把握する枠組みを提示することのなかにデヴィッドソン等に対するメリットを見たいのであろう。しかし二つの変化の基体を立てずとも、変化を蒙る受動の側からも現実活動や状態をも包括的に説明する枠組みをアリストテレスが提示しえていてと見ることができよう。変化の基体を一つとする立場のほうが現実世界の実状に

あうのではないであろうか。現実には教授者は教えることによって知識なき者から知識ある者になるのでも、知識ある者から知識なき者になるのでもない。いわば不変である。“Docendo discimus.”（教えることによって学ぶ）という格言の意味は教師はその時生徒になっている、つまり変化を蒙る者になっていると解すべきである。アリストテレスは一貫して変化を受動者の側から見ているのである。教授者が教えている時つまり現実活動の時学習者を想定しているのであって、同じことが受動の側から語られることに問題はない。やたらに存在者を増やすべきではないであろう。たとえ著者の読みが可能であるにしても、少なくとも著者は過程が厳密には受動と同定されていることを認めねばならない。Textを歪めることなしに、アリストテレスの立場の現代哲学の諸立場に対するメリットを捜すべきであつたと思われる。

次に著者のアクラシアの理解について疑問を提示したい。興味深い第3章の論述を紹介できなかったことは残念であるが、ここでは『ニコマコス倫理学』7巻3章の論述のおおよその筋は既知のものとして進めさせて頂く（p. 117 ff）。先述の分析によるアクラテース（AC）、エンクラテース（EC）そして賢明な人（PM）の差異は穩健欲求—被基礎理論（p. 168）に基づけば次のものとなろう。（IVM（状況の価値評価と動機的応答の統合）、SVM（状況の価値評価と動機的応答（衝撃）の分裂）APD（ x ）、APD（ y ）（アポステリオリ生理学的データ、 $x > y$ ）RJ（合理的判断： ϕ は最善と欲求される ϕ を為す最善の道と判断すること： $(\phi \rightarrow \phi)$ ）SRJ（二次的合理的判断： w は善いと欲求された z を為す最善の道と判断すること： $(w \rightarrow z)$ ）PR（選択意志（phroharesis）＝思慮（実践推論含む）によって行為者に開かれた選択肢のうち最善と判断されたものを為す欲求）（cf. p. 131）NCD（ z ）（無比較的欲求、 z は善い）A（行為 ϕ 、 w ）

（PM）——IVM + RJ（ $\phi \rightarrow \phi$ ）+ PR（ ϕ ） $\Rightarrow$ A（ ϕ ）

（AC）——SVM（APD（ x ））+ RJ（ $\phi \rightarrow \phi$ ）+ NCD（ z ）+ SRJ（ $w \rightarrow z$ ） $\Rightarrow$ A（ w ）

（EC）——SVM（APD（ y ））+ RJ（ $\phi \rightarrow \phi$ ）+ NCD（ z ）+ SRJ（ $w \rightarrow z$ ）+ PR（ ϕ ） $\Rightarrow$ A（ ϕ ）（cf. p. 168 ff, p. 133, p. 208, p. 211, p. 137 ff）

行為者の諸形態（PM，EC，AC）を決定するのは動機的狀態（欲求）の強度でありアリストテレスは穩健欲求—被基礎理論に組するのであって、アクラテースがアクラティックな行為をするのは善い実践推論の善い結論を「完全には知っていない」（1147 b 10-12）が故に信念と価値評価の差異が行為者の諸形態を産むとする主知主義者理論（Intellectualist theory）には組みしないと著者は解する（p. 161 ff, p. 168-9）。だが、x によって z への欲求にかられている時は無力化されるが、行為を支配するのは欲求だけなのではなく、生の諸価値への安定したコミットをもたらす安定した人格もある役割を果たすのであり、それはここでは ϕ を最善とする判断に表現されている。そしてその判断の強化によって z にひきずられなくなることもあるという、つまり欲求という動機的狀態のみが決定的ではないという意味で「穩健」と言われている（cf. p. 175, p. 163）。評者は方向と線において概ね著者に賛成であるが、両理論の緊張関係は著者が考える以上に強いことを示したい。7 卷 3 章の終わりでアリストテレスは「情念が生じるのは本来の知識（*kyrios epistēmē*）が在るという思いの現前においてでなく、（また本来の知識は或る状態の情念の結果として引きずり回されたこともないが）、情念が生じるのはむしろ感覚的知識の現前においてである。」（1147 b 15-17, p. 121）本来の知識があれば情念がどんなに強くても影響されないとこの箇所は解するであろう。著者は本来の知識とは普遍項のそれであるとする。

アリストテレスはソクラテスの本来の知識（proper knowledge）は個物の知識（感覚的知識）を包含するという考えを拒絶するがそれは本来の知識を感覚的知識 i.e. 個物の知識から区別することによってである（1142 b 25-28）。というも本来の知識は専ら普遍項に関わるからである。しかし、本来の知識は打ち負かされることも奴隷のように引きずり回されることもない（1145 b 24）というのは正しい。というもアクラシアの攻撃の主体は個物の感覚的知識であって、本来の知識ではないからである。（p. 124）

これは trivial な解釈である。情念の攻撃対象が個物であって普遍でないならアプリオリに普遍についてあるとされる本来の知識は引きずり回されるこ

とはないであろう。このような矮小なことを章の結論としてアリストテレスが語るとは思えない。本来の知識は情念の攻撃の対象でありかつしかも打ち負かされることのないものと解すべきである。著者は本来の知識が感覚的知識と対比されていることから普遍の知識と読むがその必要はない。評者は善い実践推論の前提（普遍命題）に裏付けられないしそれと共に見られた（*suntheorein* cf. p. 126）個別に関わる結論を保持しているさいの知識が本来の知識と呼ばれていると解したい。普遍が個物において例化されるということは可能態にあったものが現実態のものとなることであって現実のひとつの力として働いている知識である。行為がかかわるのは今ここ（*hic et nunc*）の個別的な事柄なのであってそこにかかわる知識が問題となっているのである。アリストテレスは『靈魂論』2巻5章417a21 ffで二つの可能態と一つの現実態を区別している。（cf. 2巻1章412a6 ffでは同記事態を一つの可能態と二つの現実態に区別している。）

可能態1：能力（*dunamis*） e.g. 可能的な知識者。人はそれ自身類ないし質料として知識Eを獲得する能力を持っている状態。

可能態2：所有ないし潜在性質（*heksis*） e.g. 可能的な知識者。人が欲しまた外からの妨害がなければその知識Eを活動させることができる状態。

現実態：現実活動 e.g. 現実的な知識者。人が所有している知識Eを現実活動している状態。

ここでの現実活動をアリストテレスは個別の知識の活動ととらえている。「現に彼の知識を活動している人は現実態にあって、そしてこのA（*tode to A*）を本来的に（*kyuriōs*）知る者としてある。」（417a28-29）『分析論後書』でも個別的なものにたいする現実活動としての知識は「端的な（*hapulōs*）知識」と言われている（71a28, cf. 1087a15 ff）。従って行為が問題となる今この場面においてこのような仕方では知識が現実活動している場合にはアクラシアには陥らないという知は力だという主知主義的側面を著者のような仕方では否定することは出来ないであろう。「主知主義」という使い古され風化し歪められてしまった言葉ではこの緊張を正しく伝え得ないとすれば、む

しろ自己の生全体がすみずみにいたるまで自己の一つの中心 (cf. a stable (fixed) character p. 155) から生命が通った仕方であるかという意味で、目覚めているかどうかがここで問われていると言えよう。アクラテースは酔いから覚めると後悔するという事態が、アクラシアの現場においては眠りこけていたことが知れる (cf. 1147 b 12)。エンクラテースとは「その時汝らはいかなる実を結んだと言うのか (tina karpon ekete tote), 今は恥とすることどもではないか。」(St. Paul. ロマ書 6-21) と苦々しい恥づべき過去を現前に想起しながら、自己を叱咤し戦っている目覚めている人のことである。アリストテレスによって「過度のまた劣悪な欲望を持つことがない」(1146 a 12) とされる賢明な人 (ソープローン) は「後悔をしない」(1150 b 29) とされる放縦な人 (アコラストス) とともに一つの生のあり方の理念型であって、現実にはそういう人がいるかどうかにはコミットしていないと解することは一つの可能性として残ると思われる (cf. 1177 b 26 ff, 1073 a 15 ff)。(ルターがトマスを紹介してアリストテレスにあの有名な評価を下したことは残念なことであった。) 我々の生は目覚めているか眠りこけているかという二者択一の緊張のなかに営まれていると言えよう。ソクラテースは知者なのではなく目覚めていた人だったのである。

ここでの最後の疑問は物理的状態の生起が心理学的記述を、心的出来事を原因することなしに、「真とする」存在論的唯物論、同値類唯物論についてである。物理的生理的状态と心理的状态の関係は質料・形相の類比でとらえられ、生起において質料が形相を或る条件のもとで必然化する必然性の関連にはあるが因果的ではなくまた還元不能なものである。上で見てきたように著者はアプリアリな目的論的合理的行為の図式 (ARA) (1') がアポストリアリな心理的-物理的因果的行為の図式 (RA) にいかなる意味において「依存」(rests on) しているかに関し粘り強い卓抜な議論を展開しているが (cf. p. 206, 199 n. 3, 219, 228, 235), 肝心の心理的と物理的なものの間の質料的必然性がいかなるものであるか不分明である。先に質料と形相関係を同値関係と見ることはアリストテレス的ではないと字母と語節の例を引用して述べたが、字母 b, a があるからと言って語節 ba があるわけではないが、語

節は字母なしにはないという意味で、質料的必然性は必要条件以上のものではないように見える (cf. p. 226)。他方「非因果的に十分」とも言われ、十分条件のようにも見える。著者はこの必然性は同一の対象において同時に生起するのであるから、始動因のような押す・引くというエネルギーの移行はないとしており (p. 222)、この必然性は複合体ないし形相の生起の際にあるのであり単に必要条件と取ることは出来ない。この必然性の不分明さは常にこれと対になって、物理的状态ないし質料の側が「或る条件のもとに」ある時必然化されると言われるこの条件の実質の不分明さによる。著者が「或る字母の生起は、或る条件のもとで、或る語節の生起を質料的に必然化する」(p. 28, cf. p. 221) ここでは単に「必然化する」という文において「因果的先行条件」(causal antecedents) が「条件」の実質であるとしているとすれば (p. 29)、質料プラス始動因が事物の生起を質料的に必然化するということである。つまり質料的必然性は因果性とは離れてありえないことになる (p. 222)。実際、始動因のもつ原因的必然性と質料的必然性は実質上区別されず、始動因のような因果的關係を表現する必然性と同じ文脈のなかでこの必然性が現れる箇所がある。この必然性関係は先述のように $O(ph \text{ in } C) \rightarrow O(b, m) \rightarrow O(a) \rightarrow O(p, s.)$ と表されるが、この連鎖から著者は「 $O(ph)$ は C^* における $O(p, s.)$ を必然化する。」(p. 216) を推移律によって導く。しかし最初の $\rightarrow$ の物理的状态と体の動きの關係は因果的なものであり、必然性の理解に因果的必然性と「物理的出来事は欲求 (心理的出来事) の生起を非因果的に必然化する」(p. 219) とか先に見た「非因果的に十分」と言われる必然性との混同が見られる。(ただし条件 C と C^* を区別することによって矛盾をさけることは可能とも見えようが、 $\rightarrow$ で示された必然性の内容は違うと言わざるを得ない。)

著者が必然性を因果性から区別するのは存在論的唯物論を守ためにである。「存在論的唯物論者であり続けたいと望むならば、この (物理的特性と心理的特性の) 關係は因果性とアプリオリな論理的含意とは区別される必然性の一形態でなければならない。」(p. 246) 心理的状态は物理的状态に質料化されてのみその実在は知られうるが、それが原因-結果として「別に離れて」

あるのではないとすることによって二元論そして随伴現象論をかわそうとする。しかし先に見たように語節 *ba* は字母 *b*, *a* と「異なる何か (*heteron ti*)」(1041 *b* 17) と言われる場合に著者はこれをどう解するのであろうか。著者が「或る状態にある一片の青銅は或種の像があることにとって非因果的に十分である」(246) と語る際の「或る状態」とは不明瞭であるが、非因果的であるとすればつまりエネルギーの移行がないとすれば、すでに形相づけられたものと実質上同じでありながら、「像であること」という形相ないし本質を持たないものと解さざるをえないであろう。それが、「同一であるが、本質において異なる」同値関係の二つの元ということなのであろう。行為の例で言えば「体の動き」は「行為」にとって非因果的に十分な関係にあるとされている (p. 236)。このような事情であるとすれば、たとえ著者が認めないにしても、形相や本質は *nominal* なものであり記述の仕方が「異なる何か」であることになる。そしてこれは非アリストテレス的である。というのもアリストテレスは「何故に」という問いで求められているものは、これらの質料がこれこれの事物であるゆえんの原因、すなわち形相である。」(1041 *b* 7-8) とし、形相こそ質料の事物となることの原因と解しているからである。つまり著者の主張するように形相ないし心的出来事が物理的状态に質料化されることによって事物なり行為の原因となるというのではなくて、形相が質料をして事物たらしめているのである。行為の例で言えば、これこれの体の動きが行為であるのはこれこれの目的の故にであって、体の動きに目的が「質料化される」ことによって行為となるのではない。形相ないし目的は欠如的基体 (質料) の生成の原因であって実在的な「異なる何か」である。そうであるとすれば、形相や形相の本質 (形相とその本質は同一である) (1043 *b* 2, 1032 *a* 5-6) が「質料化される (*enmattered*)」という表現であるとかアプリアオリな心的出来事とその価値、目的の関係がアポストリアオリな心理的-物理的状态に「依存する (*rest on*)」という表現は非アリストテレス的である。これらは唯物論の立場からの記述であって、これらの議論から唯物論を根拠づけるとすれば、それは論点先取であると言わざるを得ない。

他方心理学的概念の物理的過程への還元不能性を主張することによって筆

者は強い同一性論をかわそうとするが、それは心理的状态の価値づけられた目的論的ゴールの還元不能性に訴えることによってなされている (p. 229)。物理的状态は心理学的目的論的体系を構成する価値を欠いているのである。或る物理的状态は有機体が或る心理状态にあるという記述を真なるものとしようが、そのタイプの心理学的状态においてあることの本質を説明することは出来ない。評者はアリストテレスは「心的状态に関して実在論者」(p. 243)であるという著者の立場に賛成であるが、これまで見てきたように「質料的必然性」ないし「非因果的に十分」ということの意味が始動因との混同のため不分明であるがゆえに、いかにして存在論的唯物論と心的状态に関する実在論が共存可能であるのか不明であると言わざるをえないであろう。そもそも形相と質料が関係概念であるとするならば (p. 244, 246)、形相ないし心理的状态は形相的に質料ないし物理的状态を必然化するとも言いうるはずである。というのも質料は形相なしにはなくまた逆もそうだからである。そうであるとすれば、存在論的観念論を主張することも権利上同等になしうるはずである。同値類唯物論のもう一つの弱点は質料と形相の類比が成り立たない形相ないし現実活動のみの実在をアリストテレスが認めていることである (eg. 1072 b 26 ff)。しかしこの質料的必然性の理論が「不完全」なものであることは著者自身が認めていることであるので (p. 245)、著者がその方向でその解を模索している *Supervenience* の理論の展開が望まれる。

アクラシアの問題を軸に倫理学、心理学、形而上学、説明の理論、科学の哲学等多岐にわたる問題を取り上げている魅力的で野心的なこの研究は今後のアリストテレス研究の方向を決定する *seminal work* となるであろう。この書は粘り強く公平に多様な視座から思索する哲学者の面目躍如たる、繰り返し読まざるべきまたその報いの大きい名著であると言えよう。

(幾つかの書評があるが、Michael V Wedin (*Ancient Philosophy* 6) のそれが公平で著者のポイントをよくとらえ有益である。T. H. Irwin (*Phronesis* Vol. 33) のそれは重要な第1, 5章には一切触れず小さな点をゲリラ的に攻撃しておりあまり勧められない。田中亨英, 田中伸司, 中沢務, 中戸川孝治, 山田友幸の諸氏との議論から裨益するところ多く、お礼を申し上げる。)